

---

# **夏ホラー2008短編集あれこれ**

ミラージュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏ホラー2008短編集あれこれ

### 【Zコード】

N7131E

### 【作者名】

ミラージュ

### 【あらすじ】

夏ホラー2008～百物語～企画で執筆した短編やボツ作品詰め込みセットです。

## 看護の心(前書き)

この作品はボツにした作品です。  
自分で執筆して『怖くないな』と思つてしまつて……。  
でも、せっかく書いたので投稿してみました。  
どうぞお手柔らかにお願い致します。

## 看護の心得

あれは三年前、私が県内でも有数の大学総合病院に看護士として勤めていた時の話です。

看護学校を卒業して初めて病院に採用された私は、研修を兼ねて様々な科の病棟に月替わりで配置されていました。

外科に始まり、内科、小児科、脳外科など色々な看護士の先輩や患者さんとの出会いで、最初はまともに血圧すら計れなかつた私も次第に仕事に慣れてきて、自然な笑顔で患者さん達と挨拶が出来るようになつてきました。

そして、私は研修の最後に精神科の閉鎖病棟に移動させられました。そこで私は、子供の頃からずっと憧れていたこの看護の仕事が恐怖で出来なくなつてしまつた原因となつた『あの現場』を目撃してしまつたのです。

「山田さーん、ご飯食べ終わりました?」

「…………」

「…………少し残しちゃつたみたいですね、じゃあ、病室に戻りましょうか」

閉鎖病棟での看護の仕事は、私が想像していたものよりもはるかに大変なものでした。精神科と聞いてある程度の覚悟を決めて挑んだも

の、患者さんの中の方は普通の人にはちょっと理解出来ない奇妙な一癖があり、中にはまともに会話や食事も出来ない年配のお婆さんもいました。

病棟の廊下を一日中パタパタと歩き回る女性、自分が何故この病棟にいるかわからない失調症の男性、夜中に病室で奇声を上げて暴れるお爺さん、他にも病棟には十人くらいの患者さんが入院していました。

病状によっては他の患者さんと会わせる事が出来ない人達もいて、そういう患者さんは入り口に鍵がつけられている個室に入れられて、廊下にあるトイレに自由に行けない代わりに各部屋に排出用のおまるが設置されています。それらを掃除するのも私達看護士の仕事、とてもハードな勤務内容でした。

でも、汚いなんてとても言つてられません。この仕事は私が自ら選んで就いた仕事ですし、患者さんの中でもある程度病状の軽い人達もいて、めったに笑う事の無い患者さんから『いつもありがとうございます』と笑顔で感謝されたりすると嫌な事も忘れる事が出来ました。

そんな隔離病棟の中には、まだ小学生か中学生くらいの女の子達も四人いて、病棟の中央にあるホールでみんな仲良くテレビを見ながら絵を描いていました。

「みんな絵が上手いね？ 将来は漫画家さんになるの？」

「ううん、アニメクリエーターになりたいの」

楽しくお喋りしたり絵を描いている姿を見る限り見た田は普通の女の子達なんですか、みんな家族の人や他人と上手くコミュニケーションが取れなくなってしまった障害者、つまり引きこもりの子達なんです。今でいう、『腐女子』ってやつですかね。

学校に行く事を拒み、家でも親と会話をしたがらず、に自分の部屋に閉じこもってしまう。それが手に負えなくなつた保護者の方々がこの病院に入院させてきた訳です。

「あれ？ もう食べないの？ まだご飯もおかずもこんなに残つているのに」

「……食べたくない……」

その四人の女の子達の中でも、一人どうも臆病で精神状態が安定しない女の子がいました。彼女は極度の拒食症で、毎日三度の食事もいつもほとんど残してしまいます。時折何かに怯える様に震えだし、夜中に病室で大声を出して暴れ出す事もしばしば。

この病院に入院したきた原因は、どうやら学校で想いを寄せていた男子から『デブ』と言わ�て心を開ざしてしまったそうなんです。私はからはそんな太っている様にはとても見えない、長い髪が良く似合つ可愛い女の子なのに。

「ちゃんとご飯を食べないと元気になれないぞ？ 元気になつてここから退院して、酷い事を言つたヤツらを見返してやらなきゃ」

そんな少女にいつも優しい言葉をかけてあげる眼鏡の男性。私がこの病棟に来た時に教育係として指導してくれている先輩の看護士です。私のより五歳年上の男性で、明るく真面目な人でこの病棟のナースステーション内でもリーダー的存在でした。

彼とは夜勤のローテーションも良く一緒になる事が多くて、精神科

での看護の仕方や入院中の患者さんの詳しい性格や行動、接し方などを色々指導してくれました。

誰にでも明るく挨拶をし、それがお年寄りの方でも子供達でも差別なく話しかけてあげる優しい人。新人である私にとっては、まるで教科書の様な看護士さんでした。

しかし、私が女性だからそう見えるのか、患者さんに話しかける態度が少し強引な感じもありました。もちろん、私に話しかけてくる分には別に気にはなりませんでしたが、まだ幼くただでさえ精神が不安定な女の子達には若干嫌がられているようにも見えました。特に、臆病で心を開かしているあの子には。

「ほら、せめてこの『J飯』一口でも食べようよ、僕が食べさせてあげるから、さあ」

「……嫌つ！…」

好きな男子にバカにされたせいなのか、彼女の男性嫌いは相当なものでした。この先輩看護士さんだけではなく、他にいる男性の看護士さんが話しかけても同じ様に近づかれる事を拒み、酷い時には錯乱して暴れ出してしまうます。

その為、ここにいる男性看護士のほとんどの人が彼女の周りの世話をする時はむやみに話しかける事は無く、目も合わさずに素通りして下手に刺激を与えないよう振る舞います。

しかし、この先輩看護士さんだけは違いました。事ある毎に彼女の姿を見つけると、積極的に『ミニコニケーション』を取りうと近づき話しかけるのです。

「怖がらず」にちゃんとお話をしようよ、もつと素直になつて、今の自分の苦しみを僕達に話してよ」

「…………」

しかし、彼女は決して口を開けようとしません。それどころか、その積極的な看護に怯え、彼から田を避けるようにベッドの上で丸まりガタガタと震え出します。このどうしようもない彼女の状態に、私達看護士も担当の医師からもあまり過度に刺激を与えないよう注意されてはいるのですが……。

「先輩、あまりあの子に接しない方がいいんじゃないですか？下手に刺激して、この前みたいに暴れ出すると保護室に隔離しなきゃいけなくなりますし……」

ある日、いつもの様にその先輩と一緒に夜勤の担当についた私は思い切つて訪ねてみました。どうしても夜間は看護士の手も少なくななるし、医師の帰つてしまつて病院にはいません。もし、彼女が暴れ出してしまつたら他の患者さんにも影響が出るかもしれないし、そうなつたら経験の少ない私には対応が出来ない不安もあつたので……。

「何を言つてるんだ君は？ 僕達看護士までもが患者を避ける様になつたら、一体誰が患者さんを守つてあげられるんだよ？ 俺はあの子に早く良くなつてもらつて、ちゃんと周りの人達のコミュニケーションが取れる様になつてもらいたい、そして、いつか元気にな

つて再び学校に通える様になつてもらいたい、それが僕の願いなんだ

「しかし、先輩……」

「これはね、セラピーなんだよ、治療の一部みたいなものさ、僕は今、個人的に心理学を勉強していて、いつかはちゃんとした精神科医になつてたくさんの苦しんでいる人達を助けてあげたいんだ、でもその気持ちは今だつて同じ、僕達看護士だつて何か患者さん達にしてあげられる事があるはずだ、だから俺は諦める事なく彼女に話しかけて少しでも苦しみから解放させてあげたい、きっとそれこそが看護士の仕事なんだと僕は思つてゐるんだ、それこそが、本当の看護だつて……」

彼の看護に対する熱い情熱と決意に説き伏せられた私は、それ以上何も言えなくなつてしまひました。『看護士だつて何か出来る』という言葉に感動した私は、『もしかしたら、この人ならあの子の閉ざした心を開いてくれるかもしない』なんて期待すら覚えてしました。

この人は看護士の鏡、この人の元で研修を受けられる私は幸せ者かもしれない、その時は本氣でそう思つてました。私もいつかこの人

みたいに後から来る後輩達に尊敬されるような看護士になりたいといまつた。

この時、まだ私は自分がこの後に見てしまう悪夢の様な出来事など予想すらしていませんでした。いや、そんな事考えられる訳がありません。正常な神経をしている人間だったら、誰だつて……。

「じゃあ、いつも通り君は向こうの病室から見回りを始めてくれ、僕は逆側から回つていくから」

彼と夜勤が一緒の時は、いつも私が右端の病室から患者さんの見回りを始め、彼が左端の病室から回つていきます。私が回る病室には年配の患者さんが比較的多く、結構手がかかる方がいらっしゃいます。そりゃ私は研修中の身なのですから、勉強の為にそういう患者さんと接するのは当然です。

その患者さんの中で一人、自分で歩く事が出来ないお婆さんがいて、いつも夜中に寝る事が出来ずに履いている紙オムツに便をしてします。排出用のおまるがこの病室にも設置されてはいますが、お婆さんは一人で立ち上がる事が出来ないので仕方が無いのです。なので、私はいつもこのお婆さんの紙オムツの取り替えに手間取つてしまい、次の病室への移動が遅くなつて病棟の半分以上の病室を先輩が先に見回りしてしまつのです。私はいつも三分の一を見回るのが精一杯でした。

「……あれ？」

でも、この日はこれまでとは違いました。いつも寝ないで起きているお婆さんは今日に限つてスースーと静かに寝息を立てていて、オムツの中もまだ綺麗でした。

「……これなら今日は、ちょっとは先輩に追いつけるかな」

少しでも成長したところを見せたかった私は、若干急ぎ足で病室から廊下に出ると先輩がどこまで回つてきているか確認しました。どうやらまだこちらまでは来ていみたい、今日はちょうど半分ぐらこの場所で会えそうだ、私の心は小躍りしていました。

そして次の病室に入ろうとした時、私はナースステーションの横にある衛生管理室の扉が少し開いて中から照明の光が漏れているのが見えました。と同時に、その衛生管理室の正面にある個室の扉の半開きになつてているのが確認出来ました。

どうやら今日は、先輩の方が患者さんの排出物の処理をしているみたい、一体先輩にそんな仕事をさせちゃつていい患者さんは誰だろう、気になつてしまつた私は見回りの途中なのにその扉が半開きの病室に近づき、外についている名札を確認しました。

「……あつ」

その名札に書かれていた名前はあの拒食症の彼女の名前でした。ちよつと下品な話ですが、お通じがあるという事はあの子が何かしら食事を取つてくれているという証拠。

ちゃんと先輩の熱意は少しずつでも彼女の心に届いているんだ、私はホツとして胸をなで下ろし、見回りの続きをしようとした後ろを振り向いた時、その病室の中から小さな声が聞こえてきたんです。

「……ウツ、ウツ、ウツ……」

泣き声でした。間違ひなく、あの子の泣き声。何で泣いているのかサッパリわからなかつた私は、突然物凄く嫌な雰囲気を感じて静か

に開いている扉から中を覗いて彼女の様子を伺いました。

「……助けて、誰か助けて……」

ベッドの上に丸くなつて座つていた彼女は、涙をボロボロ流しながら震え上がつていました。過去にも彼女が怖がつて震えている場面は何度か見てきましたが、この時の怖がり方は看護経験の乏しい私が見てもあまりに異常なものでした。

「……どうしたの？　何でそんなに震えているの？」

「……看護婦さん？　看護婦さん！　助けて、助けて！」

「落ち着いて！　大きな声を出したらみんなが起きちゃうー・大丈夫だから落ち着いてー！」

駆け寄つた私に抱きついた彼女は、こちらまで揺らされるぐらいにガタガタと震え上がつていました。まるで、何か得体の知れない怪物でも見てしまつた様でした。今まで経験の無い出来事に、私は少しパニックに陥つでました。

「一体何があつたの？　あの優しい看護士さんがあなたのお世話をしてくれていてるんでしょ？　それなのに、何をそんなに怖がつていの？　あなたも少しは私達に心を開いて……」

「……悪魔……」

「……えつ？」

「あの人、悪魔！ お願い、助けて！ ここから出して！ お願い！」

この様な狂言みたいな発言は精神を病んでいる患者さんには良くある事で、私も一度女性の患者さんに『殺される！』と言われた事もあります。しかし、彼女の怯え様はそれらの患者さんとは一線を画していく、私は背中に強烈な寒気を感じました。

「……先、輩？」

押し潰されそうな緊張と恐怖に襲われ、どうしていいかわからなくなつた私は急いで衛生管理室にいる先輩の元へと向かいました。しかし、それは間違いでした。その時私は決して見てはいけないものを目撃してしまつたのです。

「……エヘ、エヘ、エヘヘ……」

おまるに入っている排出物をピンセットで摘み上げ、大切に透明のフィルムケースにしまい込む悪魔の姿。患者さんに笑顔を振り撒いていたあの顔は虫酸が走るような下品な笑みを浮かべ、目は血走り、

開いた口元の端からは涎を垂らしてゐる怪物の形相。私が一瞬でも心から尊敬したあの先輩の姿はもうどこにもありませんでした。

「……可愛いよ、凄く可愛い、この粘り気、この色、この臭い、今まで最高の状態だよ……」

彼女の汚物をピンセットで搔き回した悪魔は、事もあるうにその一部を自分の舌の上に乗せると口の中に含みクチュクチュと味わい始めたのです。その光景を見た私は吐き気をもよおし、一瞬氣を失いかけるほどの嫌悪感に襲われました。

「……最低……！」

目の前で行われている悪魔の儀式に耐えられなくなつた私は、恐怖のあまり病棟から逃げ出し別の階のトイレの洗面台で嘔吐していました。それで少し落ち着いた私は急いでその階のナースステーションに飛び込み、アドレスを調べてあの子の担当の医師に電話をしてこの詳細を話したのです。

私の内部告発で行われた緊急のカンファレンスで、先輩は正直にこの異常な行動を認めました。しかし、その後に彼から語られた虫酸が走るような真実は、私を含めその場に参加していた他の医師達も言葉を失うほどのものでした。

この悪魔は普段から幼い少女に対して異常な性癖を抱いていて、あの子の事も性の対象として見ていたらしく、嫌がる彼女にしつこく

接していたのはその為でした。

彼女が拒食症を克服して退院する事を嫌がつた悪魔は、信じられない事に病棟内に下剤を持ち込むと私達に知られぬ内に彼女の食事に混ぜ、下痢をさせる事によつて体重の増加をわざと阻止していたのです。

あまりに非道な欲望はそれだけでは満たされず、排出物を持ち帰つては自分の家に保存し、一目に隠れて彼女を精神的に追い詰め氣力を奪い、お風呂や着替えの面倒など全ての行動を束縛しようと企んでいたのです。

彼女も最初は家族や医師、他の看護士に相談した事もあつたらしいのですが、病状から狂言と判断されてしまい、誰も信じてはくれなかつたそうです。

そして、慢性的な下痢症状と度重なる猥褻な行為で肉体的にも精神的にもすり減つてしまつた彼女は抵抗する氣力すら失い、ただひたすらこの拷問の様な苦痛に耐えていたのです。

話によると、この悪魔の凶手にかかつた子供達はすでに退院した他の患者さんにもいて、そのほとんどの少女が恐怖のあまりこの事を親にも話せなかつたそうです。あの時病棟にいた他の三人の少女達も、危うくあの悪魔の犠牲になるところでした。

その後、私を信じて助けを求めてきた彼女は無事に病気を克服して元気良く退院していきました。それを見届けた私は病院を退職し、それ以来二度と看護士の仕事には就いていません。優秀なナースになりたいという夢がありましたが、私はあれから少し人間不信に陥つてしまい、それにまたあの様な場面には二度と出会したくはないので……。

あれから三年経つた現在、あの善人の面を被つていた忌まわしき悪魔は今も裁判所で裁きの刑の重さを争っています。出来る事なら一生外には出て来て欲しくありません。あの時見たこの世のものとは

思えない悪魔の微笑は、今も夢に見るほどの私のトライウマになつてしましました。

—完—

## この手紙をこなしゃ（謹書也）

フジヒ思ひついて適切に書いた短編です。

どうぞお手読みかにお願い致します。

こつまでじつじょ

「わーー、ママ、ママー、キレイな海が見えてきたよーー。」

「あら、翠はこうこう景色を見るのは初めて?」

「うん、初めて! 海で泳ぐの楽しみー、いっぱいいっぱい泳ぎた  
ーー!」

「やつね、後でいっぱい泳げるから楽しみにしててね?」

休日の昼下がり、私は翠を連れて車で観光地で有名な海岸沿いを走  
っていた。天気も快晴で、海水浴をするにはもってこい日和。助手  
席に座る翠は車の窓から外を覗いて二口二口している。

「あーあ、パパも一緒にたらもうと楽しめたのになー?」

「しようがないでしょ? パパだってお仕事が忙しくて大変なの、  
そんなワガママを言ひちやダメよ?」

昭雄さんは現在海外に出張中。一流企業に就職し、着々と出世のH  
リートコースを歩んでいるので仕方の無い事。むしろ、愛する人が  
海外で働いているなんて私からすれば白痴の一いつもある。

「ママの前の前の絵里おばちゃんと同じ事言つてるー、ママはパパがいなくて寂しくないの？」

「それはママだって寂しいわよーでも、パパは一生懸命お仕事頑張っているんだから、ね？」

「これも絵里おばちゃんと一緒にだよーママとおばちゃん、本当に仲良しなんだね！」

「そうね、私達はいつも一緒にいたわ、翠もママと一緒に嬉しくないよー！」

「うんー、ママだーい好きー、ママがいればパパがいなくて寂しくないよー！」

私には双子の姉がいる。『真理』と『絵里』と名付けられた私達は見た目も声も背格好も全て瓜二つの姉妹で、実の両親でさえもたまに私達を見間違えてしまつほどだった。

私達はいつも一緒だった。家でも学校でも常に一人で寄り添つて行動していた。勉強する時も、遊ぶ時も、寝る時だっていつも一緒に好きな食べ物も可愛いと思つ服もみんな一緒にだった。

「ママいいなー、あたしも双子に産まってきたかったなー！」

「そうー、でもね、双子って結構大変なのよー、一人っ子の體にはわからなーと思つけど、困っちゃう事がたくさんあるんだから」

『近所一のそつくり仲良し姉妹』と言われた私達は、進学した高校や大学も同じ学校を選んだ。でも、実際には私よりも若干姉の方が学力に優れており、私は必死になつて姉に追いつこうと努力した。大学に進学した頃から次第に私と姉の差は学力だけでなく私生活にも違いが現れ始め、異性に対しても少し奥手だった私はいつもお洒落で社交的な姉の後ろに隠れていた。その姿を見て、周りの人間達には『背後霊』なんて言われてしまつた事もあつた。

そんな時、私達は合コンで当時まだ学生だった昭雄さんに出会った。ハンサムで高学歴、そして女性をいたわる優しさを見て私は彼に一眼惚れした。初めての恋だつた。

「ねえ真理、私どうしても自信が持てないの、こんな地味な私にあの人気が振り向いてくれるなんて……」

「そんな情けない事を言つてちゃダメよ絵里！　あなただって本當はとても魅力のある女の子なんだから、自信持つて告白しちゃいなさい！　私がついてるわ、私達はいつまでも一緒よ！」

姉の励ましに推されて、私はありつたけの勇気を振り絞り昭雄さんに自分の気持ちを伝えた。すると、昭雄さんは私の告白を心から受け止めてくれた。こんな私を恋人として迎え入れてくれたのだ。地味だった私の人生は一気にバラ色に変わつた。昭雄さんは私をとても大切に思つてくれて、毎日の様にデートを重ね、二人海外に旅行に行つたりもした。将来の約束もその時交わしたのだ。

「でも、絵里おばちゃんはいつになつたら結婚するのかなー？ おばちゃんもママに似て綺麗な人なのにー？」

「……………」

姉はそんな私達を常に影から支えてくれた。喧嘩をして私が落ち込んでいる時も優しく励ましてくれて、代わりに昭雄さんに対して怒ってくれたりした。友達のみんなと一緒にいる時も、私と昭雄さんが仲良くしているのを一コ二コしながら見守つてくれていた。私は姉に感謝した。姉と双子として産まれてこれた事を心から幸せに思つた……。

「ねーママ、どんどん海水浴場から離れていくよー・ どこまで走つていぐのー？」

「…………人がない、もつと空いている所よ…………」

だから、許せなかつた。姉が私を利用して、裏で着実に昭雄さんと交際を重ねていたなんて、信じられなかつたし信じたくなかつた。昭雄さんから言われるまで、そんな事夢にも思わなかつた……。

「絵里、ごめん、実は俺、真理さんと…………」

私が昭雄さんと交際を始めた直後から、姉は私に隠れて昭雄さんと会つていた。内氣でつまらない私より明るくて一緒にいると楽しい

姉を選んだ昭雄さんは表向きでは私が恋人の振りをして、本当は姉と共に人生を歩んでいく事を選択したのだ。

それでも私は愛する彼の事を憎む事が出来なかつた。嫌いになる事が出来なかつた。私のやり切れない苦しい思いは、悔し涙を流す私を無視する様に幸せな挙式を挙げ子供にも恵まれた姉への恨みに変わつていつた。

「返して！ 私の幸せを返して…！」

だから、私は『真理』を殺してこの海岸の海の底に沈めた。姉さえこの世からいなくなつてくれれば、きっとあの人は再び『絵里』の元へと帰つてきてくれるはずだ。今度こそ、私はあの時一人で交わした約束通り昭雄さんと一緒に幸せな家庭を築いていけるんだ……。

「ねーママー、まだ走るの？ 一体どこまで連れて行つてくれるの！？」

その為には、まだ消さなきやいけない邪魔者が一人いる。

「あなたの大好きなママの所よ、いつまでも一緒にしてあげる」

## 記念日（前書き）

前の『いつまでもいつしょ』から連想して書いてみた短編です。

「ねえ、今日はあなたと私の一周年の記念日よね？ 愛を込めて、あなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

同じ会社の職場に勤める裕子とは、もうかれこれ六年間の不倫関係になる。彼女はいつも一人が結ばれた日に、毎年姑息なプレゼントを一言添えたメモと一緒に私のデスクの引き出しに忍ばせてくる。

五年前は当時喉から手が出るほど欲しかった最新型のiPod。並んで買う時間の余裕が無かつた私にとって、このプレゼントはとても嬉しかった。

「ねえ、私はあなたに愛されている事がとても幸せだわ、いつまでもずっと私の側にいてくれるわよね？ 変わらぬ愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

四年前は当時興味のあつたオーブンしたばかりのディズニーシーのペアチケット。もちろん、裕子と一緒に行った。年甲斐もなく、とても楽しかった。妻には罪滅ぼしのつもりで大きなミニシッキーのぬいぐるみを買って帰った。

「ねえ、どうして最近私との時間を作ってくれなくなつたの

？仕事が忙しいのはわかるけど、やっぱりあなたとあえないのは寂しいわ、私の頭の中は寝ても覚めてもあなたの事でいっぱいなよ？その一途な愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

三年前は当時流行っていたネックレス型のペアルックのシルバーリング。確かに以前私が欲しがつて物だつたが、私のイニシャルが刻まれているそのリングは裕子のイニシャルが入つたリングとシルバーのチェーンで執拗に何重も巻かれていた。この頃から、私は彼女の束縛が少々怖くて不快になつていた。

「ねえ、私はもう四年間もずっと待つてゐるのに、どうして奥さんと別れて私と一緒にになつてくれないの？　このまま私の事を遊びにして捨てるつもりなの？　そんなの嫌よ、お願い、私を一人にしないで？　私の全身全靈の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがつてゐる物をプレゼントするわ」

一昨年は引き出しの中全体に一千円札が敷き詰められていた。裕子がこれまで蓄えてきた貯金の全額だつた。当時、私は会社の不景気に加え家や車のローンなどで金銭的に困つっていたので、彼女との関係を続ける約束でその金を受け取つてしまつた。

「ねえ、喜んで？　私、ついにあなたの念願の夢を叶えてあげる事が出来たのよ？　あなたが奥さんとの間に今まで恵まれなかつた、神様からの私達への贈り物よ？　二人分の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがつてゐる物をプレゼントするわ」

そして、去年は真新しい母子手帳と共にすでに私と妻の名前が書き込まれた離婚届が入っていた。どうやら、裕子は私の知らない内に避妊具に細工をして、私の子供を妊娠してしまったらしい。私は責任を果たす為に中絶費用と共に、妻と離婚する意志が無い事、それと最後の別れの言葉を彼女に伝えた。

次の日から、裕子は私の目の前から姿を消した。会社も辞職し、いつも二人で会っていたマンションの部屋ももぬけの空。携帯電話も一切通じなくなつて、彼女の行方は一切わからなくなつてしまつた。

「部長！ 奥様、ご懐妊されたそうですね！ おめでとうございます！」

あれから一年たつたあの記念日の日。私は仕事の成果を買われ部長に昇格し、ギクシャクしていた夫婦の仲も改善して待望の子供を授かつた。現在、妻は妊娠三ヶ月。最近は新婚当時の様に私の帰りを首を長くして家で待つてくれている。家と車のローンの目処も立ち、私の人生は最高の絶頂期を迎えていた。

しかし、突然失踪してしまつた裕子の消息は今もわからずじまいだつた。家族からも捜索願いが出され、警察が必死になつて彼女を捜索しているみたいだが、もうすでに自ら命を絶つてしまつている可能性が高いらしい。

「……裕子、すまない、私を許してくれ……」

私は心の中で裕子に謝罪すると、職場の部室で一番大きなデスクに腰をかけて引き出しを開けた。そこには、綺麗にリボンのラッピングがされた小さな箱が一つ、メモと共に置かれていた。

「ねえ、あなたと私が永久の愛を誓つたこの記念日に、やつと二人の長年の願いが叶う時が来たのよ？ 私からの永遠の愛を込めて、今年もあなたが一番欲しがっている物をプレゼントするわ」

その箱の中には、私との結婚指輪をはめたままの状態で刃物で千切られた血まみれの妻の薬指が入っていた。

## 白い糸ぐす（前書き）

小説のネタを探していた時に、ふと興味深いものを見つけたので書いて見ました。

## 白い糸ぐす

夜中でも気温三十度を超える真夏の熱帯夜、四畳半のワンルームマンションの部屋の中で青年はベッドに横たわりうなされていた。

三日前から突然襲いかかってきた謎の高熱のだと下痢による腹痛、各関節の激痛、そしてそれらの痛みすらも忘れてしまひほどの手足や背中、顔など体中全身の痒み。

高校時代に野球部で体を鍛え、健康には自信を持っていた青年はそれらの症状を『夏風邪の一種』と思い込み病院で診察を受ける事を面倒くさがってしまい、そのまま放置してしまった。

それにより、今に至りては外出する事はおろか、足の関節の痛みでまともに歩く事すらままならなくなってしまった。食べ物も喉を通らず、無理をして押し込んで下痢をするか口から吐き出してしまう状態。

青年が唯一出来る事は洗面所まで虫の様に這いずり、水を汲んで飲む事とベッドで寝る事、それと手で痒い箇所をかきむしる事ぐらいだった。

「……痒い、痒い……」

特に全身に広がった痒みは経験の無い異常なものだった。体の異変

に気づいたのは一週間前、両足の太ももに赤い発疹の跡の様なもの  
が数個現れたのが始まりだつた。

その赤い発疹は次第に太ももから足全体に広がり、いつしか腕や胴  
体や背中や首、そして顔全体にも現れるようになり、最初は蚊に刺  
された程度だつたものがいつしか皮膚の上を虫が這い回つてゐる様  
な酷い痒みに変わつていつた。

「……寝れない、痒い、痒い……！」

青年はその氣色の悪い感覚に我慢出来ずに体中をかきむしり、それ  
によつて皮膚は真つ赤に爛れて皮が捲れ、その傷口からは水分と血  
が滲み出していた。最初に異変を感じた両足は水が溜まつたみたい  
にむくんで腫れ上がり、あちらこちら真つ青になつて内出血を起こ  
していく。

この様な全く身に覚えの無い異様な病状に、青年はいよいよ恐怖  
感を抱くようになった。しかし、体が思う様に動かず病院に行く事  
も出来ない。困り果てた末、青年は実家の両親に電話をかけ助けを  
呼び、明日一緒に診断を受けに行く約束を取り付けた。

「……痒い、痒い痒い痒い！」

あと一日我慢すれば病院に行かれる、今日はもうこのまま眠つてしまおう、そう決意して横になり目をつぶつた青年の睡眠を妨害する様に全身の痒みと痛みはさらに進行していき、腫れ上がつてゐる足

の皮膚をガリガリとかきむしる。

「…………ん？ 何だ、これ…………？」

その時、手の指に感じた妙な違和感。暗い部屋の中で僅かに窓から入ってくる月明かりを頼りに指の爪を見ると、引っ搔いた爪の間に短い白い糸の様なものが挟まっていた。

それはやっと指で摘めるほど小さなもの。糸状とはいえ、布などの乾いた糸とは違い何やら少し弾力のあるネバネバとしたものだつた。指で丸めると球体に変わり、潰すとプチッと簡単に潰れた。

「…………皮膚が捲れたものかな？ 一体、俺の体はどうなってしまうんだ……？」

すると、今度は背中全体に何かが這いずり回っている様な不快な感覚が青年に襲いかかってきた。その感覚に気味が悪くなり痛む体を何とか起こし、ベッドの横に置いてあるデスクライトを点けた瞬間、青年は目の前に広がる身のよだつ光景に驚き絶叫した。

「…………う、うわあああああっ！――」

青年の異常なほどに腫れ上がった両足の上と、その下のベッドのシーツの上に大量の白い糸くずの様なものがビッシリと広がっていた

のだ。驚き慌てふためいた青年は両足にへばりついている糸くずを手で払いのけると、逃げるようになべッドから床に転がり落ちた。

「……何だよ！？　一体何なんだよこれは！？」

痛みと痒みが酷かつた両足はパンパンに膨れ上がり、すでに膝を曲げる事が出来なくなるほど悪化して捲れて爛れた皮膚はまるで象の皮膚の様に縮れて真っ黒く変色してしまっていた。

そして、ベッドのシーツに大量に湧き出た白い糸くずは良く目を凝らすと微妙にクネクネと動いていて、それはまるでウジ虫のものに良く似ていた。大きさ、長さは各それ全てバラバラで、中には先ほど丸めたような球体になっているものもあった。

「……こんなもん、どこから湧いて来たんだよ！？　俺の周りで何が起こってるんだ！？」

興奮したせいか、今度は強烈な吐き気が青年を襲ってきた。何とか堪えて洗面所まで肘を使って這いずり、激痛の走る両足を腕で支えながら立ち上がり洗面台に嘔吐物を吐き出した。

「……ゲフッ！　ゴホッ、ゴホッ……！」

苦しみから少し解放されホッとして目を開けると、衰弱仕切った青

年の目に想像を遙かに超えたものが飛び込んできた。三日間何も食べずに空のはずの胃腸、無色透明の嘔吐物の中に何やら小さな白いものがいくつもあるのが確認出来た。

「……何で、何でだよー？　何で俺の中から……！？」

その白い物体は、あのベッドの上に広がっていたあの白い糸くずと同じものだった。それらは洗面台の中でクネクネと動き回り、意志を持つている様に洗面台に張り付いて斜面を登り外に出ようとしていた。

「……あ、ああ、あああああ！」

青年を恐怖に陥れたのはそれだけではなかった。洗面所の鏡に写る自分の顔、酷いニキビの様に発疹が吹き出している皮膚の下に、何かが蠢き移動しているのがわかつた。それは顔だけではなく、かきむしり爛れた腕や足、体中の皮膚に現れていた。

「……気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い！　痒い痒い痒い痒い！」

洗面台から手を離して倒れ込んでしまった青年は、錯乱してその何かが蠢いている皮膚を思いつ切りかきむしった。すると、その腫れ上がっていた皮膚が捲れた下からは水分と共にあの白い糸くず状の

謎の生き物が大量に噴き出しつづいた。

そう、ベッドに湧き出した白い糸くず状のものは全て青年の体の中から湧き出してきたもの、寝ていて背中を這いずり回つていると感じた感覚は、皮膚の下で蠢いていたものだったのだ。

「……助けて、誰か助けてくれえ！…！」

ついには、白い糸くず状の生き物は足や腕の肉と皮膚を食い破り頭を出して、青年の体中を這いずり回り始めた。とてもない激痛と悪夢の様な光景に青年は氣を失い、その場に倒れ動けなくなってしまった。

翌日、マンションを訪れた母親により、青年は息絶えた姿で発見された。健康そのものだった体は骨が浮き上がるくらいにやせ細り、皮膚はズタズタに爛れて黒く変色し壊死していた。そして、青年の体中には大量の白い糸くず状のものが這いずり回っていたという。警察により回収され解剖を行つた結果、青年を死に至らしめた原因と、謎の白い糸くずの正体が解明された。死因は、『寄生虫の感染における全器官の食害による衰弱と壞死』、病名は『芽殖孤虫症』と発表された。

『芽殖孤虫』（がしょくじゆう）と読者の皆様はこの名前を聞いた

た事があるでしょつか？ それは生物の体内に巣くい成長していく寄生虫の一種。 れつきとした生き物の一つです。

普通、寄生虫とは生物が卵のついた物を摂取、または接觸により皮膚から口などに移り体内に侵入して卵から幼虫になります。そして、その生物の中で栄養を取り成長して、糞やその生物を摂取した別の生物に移り渡つて最終的に辿り着く生物の中で成虫となります。有名なサナダムシなどほとんどの寄生虫は幼虫時代を過ごす『中間宿主』と成虫として完全する『最終宿主』のルートが解明されていて、成虫となつたものは宿主との共存の為にプラスに働くものもいるそうです。

しかし、『寄生虫』と言つ名の悪いイメージの様に、中には潜伏する生物に対し悪影響を与える危険な虫も存在していて、人体に巣くう有名な虫にはアーニサキスやエキノコックスなどがあります。

その中でも、最も恐ろしい寄生虫として記録されているのが『芽殖孤虫』です。

先ほどにも挙げた通り、ほとんどの寄生虫は感染ルートが判明している為、未然に防ぐ事が可能ですが。しかし、この芽殖孤虫は現代の医学や知識でも謎の部分が多く、確実な感染ルートや感染しやすい生物の種類、地域などがはつきりとしていません。

しかも、最終宿主となる生物もまだ確認されてなく、孤虫（幼虫）の名の通り成虫に進化した姿を発見されていないのです。人間の体も、彼らにとつては幼虫時代を過ごす中間宿主でしかありません。大きさは一センチに満たないものや約十センチほどの白い糸くず状、あるいはアメーバ状や球体状などと正式な姿すらも未だにわかつていない氣色の悪い謎の寄生虫。

この芽殖孤虫が一度人体の中に侵入すると、彼らは自らの成長の為に幼虫移行症を引き起こし各部首の軟部や皮膚下、臓器や骨などを

食害し、とてつもないスピードで分裂を始め数を増やしていきます。そして、いつしか体内全体に侵食し人体に頭痛、発熱、下痢、炎症、血管破裂、臓器不全、言語障害といった様々な悪影響を引き起こし、最後は宿主の命までもを脅かすようになるのです。

現在、この寄生虫を駆除出来る薬剤や治療法はありません。唯一の手段として手術による摘出がありますが、分裂による進行スピードが早い為全てを摘出する事はまず不可能なのです。

現在の感染例は世界中で十四件と非常に少ないのですが、その内の六件は日本で発見されています。感染した原因は全て不明、感染者の共通点も全てまばらで年齢も二十代から七十代まで差があります。

そして、その全ての感染者の中で救命された例は一つもありません。つまりは感染したら最後、寄生した人間を確実に死に至らしめる恐怖の寄生虫なのです。

この寄生虫が初めて発見されて約百年間、医学界で様々な学者によつて研究解明が進められていますが、まだそれと良く似た生態系の寄生虫を見つけ、そこから治療の打開策を練る段階までしか至っていないのです。

我々人間の唯一の救いは、この芽殖孤虫による感染者の例が極めて少なく、めったに感染しない希な病気だという事だけです。しかし、もしかしたら私もあなたもいつかこの寄生虫に侵される可能性がゼロという訳ではないのです。

「……痒い……」

あなたは、原因不明の体中の皮膚の痒みに感じていませんか？ そして、原因不明の高熱や下痢などの体調不良に襲われていませんか？

そして何より、あなたの周りに謎の蠢く白い糸くずを見た事がありませんか……？

—完—

## 男のホラー2008（前書き）

……おまけです。

後書きと思つて戴けると幸いです。

「おーいおこ//ラージュさんよ？ 春のアノ企画であれだけはつけたお前さんが、何を真面目にホラーなんて書いてんの？」

「お前にホラーなんて無理無理！ どひせつまんねーんだからいつも通りの馬鹿な小説書けよー。」

「色々期待してるぜ、//ラージュー！」

せつでじょう、せつでじょう。皆様の仰られの通りでござります。

確かに、私にはホラー小説なんぞ全くもって無理難題でございました。所詮はくだらない下ネタコメディーしか書けない三流なろう作家、だつたら最後くらいは自分らしくハメを外してみようじゃありませんか。

題して、//ラージュ『男のホラー 2008』 -

男には、決して女にわからない様々な恐怖が何気ない生活に潜んでいたりするのです。

そんな全身の毛が逆立つような恐怖体験を自分自身や他人の経験談からいくつかチョイスしてみました。

読んで下さっている読者様に共感して戴けると恐縮です。

まづは、青春時代に良くありげなこんな場面。

「ベッドの下に隠していたエッチな本が、綺麗に机の上に置かれていた時」

俺が学校に行ってる時は部屋に入るなっていってんだぞお!!!!!!

ありますねー、こんな事。母親としては愛する息子の為を思つての行動だつたとしても、やられた本人はたまつたもんじゃありません。しかも、帰つてきた時に母親が『…………あら、お帰り…………』なんて白々しい態度取られるとダメージ増大。先に帰つてきた他の家族にまで見られたらもう家出するしかないですね。

似たようなパターンで、さらにキツいものをもう一つ。

「姉や妹などの近親系のエッチな映像見てているのを、実の姉妹に見られた時」

うわああああああああああああああ ! ! ! !

違ひの違ひの違ひの、そういう事じやなくてあのやだからね！？

ちよつとした好奇心で覗いてしまった禁断の世界を、ものの見事に見られてしまう。『ねえねえ、お兄ちゃん!』なんて笑顔でノックせず部屋に入ってきた妹の表情があつという間に責めしていく光景は正に地獄絵巻。

家族全員で食事の時間も埋める事が出来ない一定の距離を置かれ目も合わせて貰えない。それどころか、風呂に入る時も異常なほどに警戒され、学校の友達には変態兄貴呼ばわりされる始末。言い訳なんて一切通用致しません。

エッチ系の話だと、こんな意外な恐怖も日常生活に隠れているのです。

「仲の良い男友達にオススメのAV女優の名前を教えたら、『あ、その女優さんこの前自殺したらしいよ』って言われた時」

困りますねー、知らなくても良かつた新事実。こうなつちやうと見る事も使う事ももちろん、捨てるのも何か罰が当たりそうで出来なくなってしまいます。

えつ？『使う事』ってどういう意味？と、思つたお子様は是非ご自分達のお父様に聞いてみて下さいませ。きっとその時、お父様は最高のスリルとホラーを体感する事が出来るでしょう。

女性からしたら良くあるたわいのない事、しかし、男性からすると鋭い刃物を突きつけられている様な恐怖を覚える場面もあります。

「コンビニで偶然見つけた付き合ひ一ヶ月の自分の彼女が、雑誌売り場で大画面に『ゼクシィ』を立ち読みしてた時」

ちゅぢょぢょぢょぢょぢょ！……！

気が早い気が早い気が早い！！

しかもあんな分厚い雑誌を片手で持つて立ち読みしてるぅー……！

怖いですねー、あの雑誌。あと、たまごクラブにひよこクラブ。下手に婚姻届や母子手帳持つてこられるより恐怖です。しかも、あれつてハンパなく重たい雑誌なので、あんので頭叩かれたら首が鞭打ちになりそう。

男は全ての事を大体大まかに見通す生き物なので、リアルな現実を突きつけられてしまうとドン引きしちゃうんですね。あと、『中に出して』も禁句。普通萎えます。何を中に出すのかって？ お父様に聞いてみて下わせませ。

最後は、近くにあつたから寄つただけなのにそこに入ってしまった事により恐怖を感じてしまうこんな場面。

「用を足そつと急いで駆け込んだ公衆便所が、実は有名なハッテン

## 「場だつた時」

アツ――――――――――――――――――――

何でガチムチの兄貴達が俺の後から次々とトイレの中に入ってくるの！？

怖いですねえ、一番怖いですねえ。夜中の公衆便所、叫び声をあげても誰も助けは来てくれません。それどころか、気持ちの良い思いをしていると勘違いされてしまうかもしません。

と、いう事で、短い内容でしたがご堪能して戴けましたでしょうか？　これ以上ハメを外すと、さすがに企画の概要から飛び出し作品削除されてしまうかもしないので……。一企画連続で隔離部屋行  
きは勘弁して下さい……。

また、皆様とは別の作品でお会い出来ると幸いです。つーか、懲り  
ずに読んで下さい。どうかお願ひします。無視しないで下さい。一  
人にしないで下さい。置いていかないで！ 暗いよ、狭いよ、口ワ  
いよー！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7131e/>

夏ホラー2008短編集あれこれ

2010年10月10日16時18分発行